

▲十八トセはやくせけんがおだやかで、いちこくさうばになればよい、コノときさうば。

▲十九トセくにのさんぶつ、いとわたも、きぬるいのこらすねがあがり、コノときさうば。

▲二十トセ二八のおそばもとしをとり、二十四文でまだこもり、コノときさうば。

四文通用であつた文久銭が八文になつた、是は慶應元年閏五月九日、銅相場との釣合が取れぬから天保銭鐵銭の外は、時の相場を以て通用すべしと令したので、兩替屋は文銭と耳白銭は六文、小銭は四文、四文銭は十二文、文久銭は八文に引揚げた、其の中で匱質な文久銭が馬鹿々々しい割高なものになつた。

米の高値も長門ゆゑとは、長州征伐の爲め家茂將軍は二年四月に進發し、六月二十五日から大坂城にあつて征伐軍を督し、今や戦争中である、澤庵や梅干は軍需品であ

るから時價が狂騰し、米は百文に二合しない、此の五月の末にお粥騒動といふ椿事が起つた、晝夜となく細民が富家を襲撃しても、江戸は無警察状態であつて、鎮撫する者がなかつた、其の時分に何者か江戸町奉行の役宅の門柱に御政事賣切申候と勝いた張札をしたといふ、此の八月二日に家茂將軍は大坂で薨せられた。

十二月江戸中の質屋が利足を上げて一兩に銀一匁六分、一分に四十八文、二朱に二十四文、百文に四文にした。

此の頃の江戸の有様を見るのに、此の二つの數へ唄と提挈するお詠向きの『ないないづくし』がある。

、さてもない／＼ないものは、
二百になつてはとぼされない、
まつくらやみではおかれぬ、
おそばも五十じやくはれない、
油のねあげもほふづがない、
それでもつけずにやねられない、
ありあけとぼしちやたまらない、
引こしめつたにこりやできない、

おさけも高くてのまれない、
 やすい物とてさらにない、
 一疋もふけちやくわれない、
 そんなにもふかることはない、
 高くもはだかじやいられない、
 二十四文ぢやいりがない、
 とどのつまりはしよふがない、
 どふかなるにはそふいがない、

一升一分じやしかたがない、
 中から下ではなさけない、
 一分になつてもまだたらない、
 もめんもふるぎもすくない、
 ゆせんも高くてはいられない、
 だん／＼あがつてきりがない、
 さきをあんじちや命がない、

またもない／＼ないものづくし、
 芝居もねつから入がない、
 おるすの間はしかたがない、

さかりば此せつひとがない、
 よせもゆうやもよるはない、
 とのさまお供でせひがない、

おく様ひとりでねつかれない、
 文久八もんつづかない、
 そふばちがいはござらない、
 金もちもふけもすくなくない、
 御用金ならあたらない、
 よたかのねあげもむりはない、
 鐵ぼうも百でははなされない、
 なんでもかせぐにしくはない、
 でき秋まつより外はない、

おかへりまつより外はない、
 天保のおつりにやこまらない、
 おせじのおましもちいさくない、
 ない物もふかせるせきがない、
 何から何まで安くない、
 文久三つじやかわれない、
 どふすりやよいのかわからない、
 むだなおわしはつかわれない、

さてもない／＼ない／＼づくし、
 諸しきも舛もさがらない、

時よじせつよしかたがない、
 お米もたかくてしよふがない、

二合がふだいでなくわれない、
此このせつせいたくいわれない、
かうくも高くたかて付けられない、
一人にんまへではくいたらない、
三人にんまへもおしくわない、
お酒さけも高くたかてのまれない、
なまよい此このせつみた事ことない、
何なにをかつてもやすくはない、
世よの中なかなおるにそふいが無い、

むまいおかづはたべられない、
まさかにしほではくわれない、
めしやのまんまにもりが無い、
二人にんまへでもまだたらない、
そんなにくわれちやたまらない、
はかりにおまけが少すくしもない、
どうでもようほどのまれない、
けんやくするよりしかたがない、
しんぼうするより外ほかはない。

八百屋お七小姓の吉三新梓からくりこうぜう

そのころほんごうの二丁目に名だかき八百屋の久兵へは、ふしんじやうじゆするあいた、おや子三人もろともに、たんなでらなるこまごみのきちせうあんにかりすまい、てらの小せうのきちささん、しよゑんざしきのおくのまで、あいのきんからかみをそよとあげ、かくもんなされしうしろから、ひざでちよくらついでめでしらせ、これくもうしきちさ様がくもんやめてこちらむきな、かなしいはなしが有あわいな、もはやふしんもじやうじゆして、わたしやほんごふへゆくわいな、たとへほんごふとこまごめと、みちはいかほどへだてゝも、いゝかはしたるむつごとをしんでもわすれてなくだんすな、だいがかはればほんごうにてうめ八百やくゝそれよりほんごうへたちかへり、八百やせうばいするうちに、八百やでにんじんごんぼふしいたけかんひやう、

いもだいこんに、おふきなでつかいまつだけとうがん、とうなすとうもろこしの、まつかな毛のはへたのをうるうちは、かはい吉三さんにはりよかと、むすめごゝろのがんせなく、こたつのおきを、ふたつみつ、小そでのこづまにちよいとつゝみ、となりしらすのはこぼしこ、一トけたのほりてほるとなき、二タけたのほりてほるとなき、三けた四けたとのぼりつめ、これがちごくのかぞへげた、ちよいとなげたるまごびさし、たれもかれもしるまいとはおもへども、てんしるぢしるの道りにて、にんひいにんちやく、いんらうきんちやく、ちやくゝむちやくの、かまやの武兵へめにそにんされ、こいつはたまらぬ、かんじんかなめじや、うんともてこいせひなくちとうへよびだされ、お七はなくゝかほをあげ、これゝもふし、おちとう様、きのふ迄もけさ迄も申まいとは思へ共、なはめのほとがおそろしや、その日の御さいきよが、きはまれば、あしげのどうちくせうにのせられて、おててんまてうから引だされ、かみをしまだにあぶらてう、からきうきめのしほてうを、あぶらやおそめじやなければど

も、久松てうをとろゝと、お七を見にでしけんふつは、こゝやかしこにたちばなてう、とみぎはてうを引まはし、すがたやさしき人形てう、しやばとめいどのさかいてう、さてもあはれやふびんやと、てんでになみだをふきやてう、とりわけなげくはおやじはし、あめもふらぬにてりふりてう、ゑとばしこへて、四日市、にほんばしへと引出し、せひもなかばしきやうばしを、すぎればもはやほともなく、田まち九てうはゆめうつゝ、さいごもちかよるくるままち、たかなはちう八てうの其さきが、七ッ八ッやまみぎにみて、品川おもてになりぬれば、品川表の女郎衆が、あれが八百やしお七かへ、うりざねかほで、いろしろで、あのもみあげのうつくしさ、吉三がかつほれたもむりはない、こゝがおさめのなみだばし、すゝがもりにぞつきにける、おゑどをはなれたしおきばゝ四てう四ほうにやらいをしつらいて、なかにたてたるかくばしら、かわいやお七を、しばりあげ、見るもあはれな其なかへ、あまたのけんぶつおしわけて、久兵衛ふうふはかけ來り、これゝむすめ、これお七、この世でひとめあい

たさに、つへにすがつて、あいにいゝおくことがあるならば、いきあるうちいふてくれ、これのふお七といふこへも、そらにしられぬもりごへ、わつとないたるひとこへが、めうほふれんげきやう、なむあみだ佛と、むせうのけふりとたちのぼれは、こゝがおやこの名残、あはれやこの世のみをさめく、先様はこれでかわりく。

覗機關は殆ど絶へたといつてよかろうが、明治の二十年頃までは東京でも子供が其の傍に群がった、さうして唄うやうにも聞かれた妙な節のある口上の或る部分を真似て戯れもした、従つて機關の文句はチギレくではあつたが誰も知つて居た、けれども其の全體は知られて居ない、マアそれが珍しいとも云へやう、さうして斯ういふものまで瓦版の讀賣になつたといふことが面白い、又た唄でない此の口上などが聲曲化されやうとした形跡が考へられる、果然俗謡をカラクリ節で唄ふやうなお坐興もあつた。

ちよぼくれちよんがれ、紀州焼山峠順禮殺

ものゝあはれを尋てとへば、頃は天正なかばのことよ、こゝに攝州東成の郡柳下村に塔兵衛と申す百姓がござる、なんのむくひか、せんせのごうか、親子四人がぶらぶらやまひ、中にも忤藤吉、しだいやつれ、しよくじはかるし、やまひはおもし、いしやよ、くすりとかいほうすれど、ついにむせうの風がさそふて、むなしきなみだのなき玉なれば、のべのけむりと、たちゆく月日、四十九日のとひとむらひに、一家一門よりあつまれば、母はなくくまうするやうは、親にさきだつ子はせんちしき、ぼだいのためにおや子三人、おひづるかたげて、西こく三十三所のふだうちめぐりと、さうだんきはめ、でんちでんぱた、しよどうぐまでも、のこらずうつて、ろぎんといたし、二世あんらくのかどいでよしと、足にまかせて、おや子三人、こけうをはなれて、

ちよぼくれちよんがれ紀州焼山峠巡禮殺

たびのからすが泊りさだめず、淀の川せを三十こくの夜ふねうちものり、こゝに伏見か、かしこに近江のやばせ渡りて、伊勢の神がきあとに見なして、田丸の宿に、一夜とまれば、ちゝの塔兵衛は、たびのつかれか、風のこゝちか、わづらひけるが、人のいのちは、はかないものよ、つまと娘をあとにのこし、めいどの旅におもむきければ、はゝとむすめがなげきのほどは、いふにいはいはれぬ、ぐる／＼まきのかみもみだれて、しようたいなみだ、やどの亭主も、ふびんにおもひ、これさおや子のじゆんれい衆よ、なげきはなか／＼もつともなれど、なげいてかへらぬてゝごの命、あとのぼだいのとひとむらひは、御役所さまへおねがひ申シ、往來手形のさほうのとふり、宿のおてらへほうむりけるは、あはれなことよ、たむけの香花、しるしのそば、ついせんくやうも、そこ／＼おこない、おせわになつたる人／＼さまへ、一チれいのべて、田丸のしゆくをおや子は立いで、紀しうくま野のかたへと、たどり／＼て、いばら松ばらわけゆくほどに、こゝは名におふやき山峠、のぼりくだりで百二十五丁、なかにすごき

は、もうじやが洞よ、まだものぼれば、てんぐがいわや、ゆうれい坂より、びつくり谷へおりんとすれば、あとよりこゑかけ、六尺ゆたかの大の男、しゆぎやの大小、くわんぬきざしにて、おひかけおひつき、これ／＼じゆんれいおや子のもよ、そちがもつたるようゐの路ぎん、かりねばならぬと、たちふさがれば、おや子はぎやうてんびつくり谷の、のめくりゑの木へあたまをぶつ／＼け、大きにおどろき、まうしあげます、おどろぼうさまよ、四ねんふさくのき／＼んにこまり、くらしのために、とせいにいでたるじゆんれいなれば、ろぎんと申スは一文一錢、ようゐはござらぬ、どうぞおじひにおゆるしなされて下さりましと、くどけど、わびれど、ふてきなさんぞく、金のあること見こんだしごと、だすかださぬか、まひ／＼つむれ、角のでぬうち、わたせば、そのぶん、いやといふなら、此世のいとま、くわんねんひろげと、ぬく手も見せず、玉ちるばかりの氷のやいば、すでにあやふきうしろのかたより、くわいこくしゆぎやうの六十六部、せなにおひぶつ、しやくせうついて、せうごならして、あとより

ござる、かねのひびきに、とうぞくおどろき、びつくり谷よりむかふへ飛こへ、ぎやうてんばやしの木かげにたゝすみ、やうすをうかゞふ、さればおや子は、六部にすがり、神かほとけか、ふだらく札所の観音さまか、二人が命をおすくひ下され、大じ大ひのごおんのほどはわすれませんか、両手を合せ、おや子が身のうへ、いちぶしどうをおちなくかたり、あはれおちひに同行になされ、おつれくたされお六部さまよ、そこで六部がまうするやうは、たびはういものつらい中にも、女計ちや、なほさらあやふし、同道いたしてしんせたけれど、女人きんせいの山くたけくおまいりいたすに、女をつれてはしゆ行ができず、つれなく見すてりやおや子がなんぎ、とまれかくまれ峠をこへて、こよひとまりで、さうだんせんと、三人うちつれ、ふもとをさして、下ればたそがれ、やどをたづね、やうやくさゝ屋半兵衛へ一しゆくたのむ、此さゝや半兵衛とまうするものは、さんぞくとうぞくのちやうぼんなれば、あまた手したを諸こくへいだし、きりどりがうどう、おひはぎいたさせ、その身はやき山峠のふもとの町

に、はたごやせうばい、旅人をとめて、ろぎんをばいとる、やき山峠でじゆん禮おや子に、うきめを見せしも、此半兵衛が手下のとうぞく、それとはしらす六部は、じゆん禮おやこをともない、これさおやどのごていしゆさまよ、二人のじゆん禮、しさいござつて同道いたしたなれば、一夜おやどをお頼申す、われらは野中の地藏だうへこもり候なりと云ひ置、やどやを立出る、じゆん禮おやは、ひるのこはさを、ていしゆにかたれば、さゝや半兵衛うちうなづいて、金をもつて長旅するのは、いのちしらすよ、さきの六部はゆだんはならぬ、實と見せかけ、此かいどうで人をころして、ろぎんをばいとる大ぬす人とおどしかけられ、まこととおもひ、こはやおそろしやおや子が命、たすかるしあんはあるまいものかとなげけば、あるともくさひはひおらが女房と、庄やのばアさまと、ちかぐくまのへさんけいするはづ、これといつしよにおいでなさるとなんのきづかひすこしもござらぬ、だましにのせられ、女ごゝろはあざといものよ、こよひ六部に一禮のべて、わかれんものをと、六部のこもりしつちだうさして

出てゆくは、おや、あとにのこりしむすめをおどし、ろぎんのありかは、にもつのうちか、たゞしおやこがはだ身はなざすくわい中せしか、つゝますかたれと、とひかけられて、ふるへわなゝき兩手をあはせ、申しおやどの御ていしゆさまよ、ごめんくと聲たてければ、ていしゆ半兵衛は、大のまなこで、はつたとねめつけ、かべにみゝあり、こゑをたてなと口にねぢわら、のどくびとらへて、ぐつとしめれば、あはれむざんや、此世のいとま、しがいは手はやく酒だるづめにし、かゞみをうつて、にはへころがす、かくともしらず、はゝはいそゝやどへかへりて、さぞやむすめは、まちどほならんといふより、ていしゆは、あの子はさきよりねむけがさして、ひるのつかれかよくねてゐます、さぞゝおまへもくたびれたらふぞ、湯ができました、おはいりなされと、ゆどのへあん内、はゝはおいづるぬいで、きおさめの身のはてなりとはしらぬがいんぐわ、ふびんなことよ、そこで半兵衛は、はゝがゆどのへはいつた時分をかかんがへ、かねてようゐのゆどのゝ、てんせう切ておとせば、むざんなるかな、ち

ごくおとしのねずみのごとく、びつしやり命をおとしにかゝり、めぐるいんぐわか、金ゆへうしなふおやこがいのち、あるじ半兵衛は、まんまろぎんをせしめ、しがいをまたゝ酒だるづめにし、おや子いちだのにもつにつくり、まごの與八を夜中によびよせ、孫瀬が淵までつけたし、たのむときいて、與八はがてんゆかねど、だちんはしつかり、酒てはたつぷり、どつこいがてんと、むやみにつけたし、いそぐにほどなく、まご瀬がふちにいたり、にもつをおろせば、あとより半兵衛は、おひつききたり、ごたいぎゝ、これからさきは、おれがのみこみ、はやうかへつて、やすめの長半、おつとがてんと、馬引かへし、やうすはしらねど、とむらひにもつ、みちをかへんと、野なかのぢぞうのまへのとふりへ、きたかとおもへば、ふしぎなるかな、うまはひけども、すこしもあゆまず、まごの與八も、がアをりはてゝ、こゝは野なかのぢぞう堂のまへよ、ざんげしろとのしらせと見へた、順禮くさい一駄のしがい、まごせが淵まで、酒てにほれてつけたしたのは、まごの與八が、つみともなるか、とがをゆるして

おとふせなされ、六道だうだうのうけのおぢぞうさまと、おがめば、ふしぎや馬うまはいなゝき、我わがやをさしてあゆめば、あゆむ月夜の人かげ、よひにこもりし六十六ぶ、しさいをきいて、大きにおどろき、あとをしたふて、まごのゆくへを見とゞけ、なほ又孫まごせがふちをだづね、たるにつめたるじゆん禮おや子のしがいを見つけ、すぐさま此よし、おやくしよさまへ、うつたへいでれば、與八をよびあげ、半兵衛かたへあんないいたさせ、さつそくめしとり、きん郷がうきんざい、ひきまはされて、まごがふちにて、くびをおとされ、やき山峠たふげへごくもんにかゝる、手したのとうぞく七十五人、たづねいだされ、しざいとなれば、まごの與八もふとゞきなれど、ぢぞうのまへで、ざんげいたし、半兵衛かたへあんないなしたるほうびによつて、命いのちをたすけ、六ぶに下さる順禮じゆんらいがろぎんと、半兵衛がかざいのけつしよきんとをのこらず、ともに六部ぶに玉はる、のこるかたなく落着らくぢやくあひすみ、六ぶは與八をとまなひ、かうやへ登のぼり、じゆん禮おやこが、ぼだいのために、順禮寺じゆんらいじとて一字いちじうをこんりう、むかしが今まで、いんねんいんぐわは、

しゆせうさいどのほうべんなれば、きく人あしきにちかづかず、みな善道に導ししだ
い也とぞかたりける。

嬉息齋詩文集こそくさいしぶんしゅう(明和七年刊)に、宿三楞蒲暮寺しゆくさんりやうぼくぼくしと題して、獨宿橋本町ひとりしゆくすはしもとらやう、寺てら、腥なまぐさけれど
心こころ自清おのづからきよし、僧聚奕筵上そうはあつまるほんごのうへ、但聽壺皿聲たゞきくつはざらのこゑといふ狂詩きやうしがある。又また當世たうせ爰こゝかしこゝ(安永四年刊)には「ちよんがれ和尚おしやう」とも見え、當世芝居氣質たうせしはやきしつ(安永六年刊)にも、「地の太夫ちのたうぶをちよぼくり」などあり、喜多村筠庭きたむらきんていは上州祭文じやうしうさいもんの變態へんたいで、このチヨボクレから難なに波なみぶしを派出はしゆつしたかに云つて居る。

リ^{ニ上} ちよんきなぶし替唄ちうしん藏

- ▲ちよんきななく、しよだんは、かまくらかぶとあらため、かほよで、よやさの。
- ▲とんちななく、しうのむねんをいさめて、本ぞうがまつきり、よやさの。
- ▲たんきのはんぐわん、むねきを、もろのをうらむやいはで、ちよくんがよやさの。
- ▲こしもおかるに、みとれたさぎ坂、くびだけのばして、よやさの。
- ▲ふばこのつかひが、ゑんやのごけらい、かん平は戀ゆゑおちうど、よやさの。
- ▲じようしかく、はんぐわんはうきり、そばにりきやがしうたん、こりやさの。
- ▲かたみのたんとうゆづるは大ぼし、ちうぎはまつせの手ほんで、よやさの。
- ▲てんばつく、むくひはさだくろ、ニツ玉にて、どくんが、よやさの。
- ▲しんきなしうしよな、かん平ははうきる、しうとしよとのまぢがい、よやさの。

- ▲れんばんうけとり、二人りはで、ゆく、ちよちよんがよやさの。
- ▲いちりきちや、ばで、ゆうおにやめかくし、手のなるほうへとくるはで、よやさの。
- ▲なんぎなく、九太夫あごぬけ、ゑんのしたにてしので、よやさの。
- ▲春く山しなして、となせおや子が、ちよくんが、よやさの。
- ▲すごもりく、こむそうみなりで、けかる本ぞうが、ちよちよんが、よやさの。
- ▲ちうぎなく、四十七にん、かたきうちとめ、ほんもふで、よやさ。

チヨンキナは拳唄である、弘化四年此のかたトテツル拳などの所作拳流行の後に出来たもので、其の本唄は誰も知つた、

ちよんきななく、ちよんくきなく、ちよんが、なのその、ちよちよんがよやさの。

ねんねく、ねんくころく、こどもをねかして、ふたりで、よやさの。

なのだが、替唄は珍しいやうに思はれる、けれども果して流行する程であつたか否か。若樹文庫に錦繪表紙の畫入本濱上るり都々一けんがある、それは出子散人作芳盛狂畫とあつて、作者を隠してあるが、巻尾の半枚に出格子を描き、假名垣魯文といふ標札が出してある、是で出子散人は魯文なのが知れた、のみならず其の序文に、蛇は足なくしてあるき蟬は口なくして啼、魚は耳なくして聞とかや、されば圖を見て掉を知はかたき事にやあらざんめり、やつて見やしやれ、わけもない、チヨンが何のその狐拳、買に來、板本の小僧はチヨン立、チヨン居る、作者はチヨン寝てチヨンおきて、昔の耻を書の如し。

五延庚申の夏日

岳亭主人述

とあつて、チヨンキナの替唄を載せてある、濱は横濱の略で、其處で流行し、其處の繁昌と共にチヨンキナも八方に擴大したのである、都々逸拳といふ名稱も面白いが、此の刊本以外に見掛けない、又聞いても居らぬ、萬延元年の夏といへば井伊大老變死の後、幕閣は外交難浪人難に苦しんで居た、其の邊には貪着なく、チヨンキナの替唄に耽つて居た、哀れ戊午の大獄などは何の意味だか考へて居るものは、江戸の民衆になかつたらう。

兩國八景はうたいよぶし

上

▲これは兩ごくさかりばのなよせ、はなし講しやく上るりや、上萬作おどりにこ
 どもしばるや、あやつりにんぎよう、かるわざじや、小どもしん内、たまぞろい、
 よをきう、ちや見せに花火ぶね、上つゞいてかけしばる、さつてもにぎおふ夕す
 じみ江戸の花。

▲これは御ひるき、はなしの名よせ、あまたはなしのある中に、上いきなるん玉
 可樂可上は、わりかんばんで、わかれても玉助扇太郎中のよし、ありやりやん、柳枝
 のかけごへで、上金馬のまといふりこみ、さつても、そろふた大よせは江戸の花。
 ▲これは御ひるきこうしやくの名よせ、あまたじようすのある中に、上りう馬一

口馬琴貞山、いづれもはものをめいじんじや、きろく南鶴南鶯南玉、上曾我もの
 がたりやあこふきは、上凌潮凌雨凌舎に、いつもはづさぬ燕凌が大當り。

下

▲なつのうりものいろくあれど、ひよけひきがみ竹しやうじ、かまよぎのご
 ざやもんせんござ、ひきだしがたく、じようさいうり、ほんけからす丸びやよう
 とふ、めだかきんぎようやところてん、上すどしきこへをはりあげ、さつてもい
 さまし氷水うらしやんせ。

▲花の御江戸のゆやのなよせ、はうた二上り三下り、上ときわづ富元清元しん内
 一中ぶしに、かとふぶし、どいつ、とつちり、こなやぶし、きやりそをばんお、
 さはぎ、上げいのないのは、もくぎようのこはいろ、はめたき、うめしやんせ。
 ▲これは御江戸の女湯の名よせ、中はしづかで、いたのまは、上さてもにぎやか、

よると、せじようのうはさばなしをしやべるやら、せなかながしてあげまじやうと、それからたがいながしあい、上へこおけをだつぬるに、あか子をこきよふたにしてたづねます。

此の唄で江戸の民衆娛樂の狀況が略々考へられやう、錢湯で一中や河東を唄つたといふのは大分怪しいが、安政文久に富本の流行したことは夥しい、富本の方が幾分上品の方で、同時に流行つた常盤津の方が下品だと云はれて居た、明治になつては富本は全く忘れられて了つた、下品だと云はれば常盤津は衰へないで、上品だといはれた方が亡びて、復興の機會もないのは注意すべき事柄ではないか、乞食のドツヅヤから脱化した新内が何時も嬉しがられるのと共に、上品下品といふことが江戸生活の基準であつたのから考へて、現在の生活が下品の方にのみ走つて往くのが知れる、それが中間階級の遞減若しくは凋落の證據ではあるまいか、又上品下品といふことは文化の恵

みを享受した程度を示すものでないなら孰れでもいゝが、其處を決定しないと甚だ不安なものである。

新板はうたいよぶし

▲うじはちやどころさま／＼あれど、中なかにひやうばんなもたかき、上上大吉山と人のきにいる、よくあふ水にくくいろも、出でてせじよのちやのみばなしに、うきなをちやわんでたてられて、上上ほいろにかけてもまりようと、こちやこいちやの中じや物、はなりやせぬ。

▲よいのくせつについとかされて、まだとこさむきよごとにも、上上ゆめもむすばづうつらくとねむりもやらず君のこと、戀こひしくとわすられず、せめておかを、ゆめになと、上上見ばやと、あせるまもなく、しのゝめがらす、つげわたり、明ケのかね。

▲しばで切とをし、うねめが原よ、すいとはなれてさめがはし、上上きやくのとをぐに、すれたうすげをしんぞど見たてる、きやくがむり、四十あまりのよたかさん、こやの中からかををだし、上上口あけまいでござんす、これもしばからしなんじやます、よつてかんせ。

▲是は御ひるきはなしの名よせ、ひるき鐵扇むらくさん、上上情じやうあいはなしは金馬しん生龍蝶りう馬に馬の助、などは歌六鯉りかんさん、おんぎよく咄はなしは雛太郎、上上ついで馬風馬生は、だい／＼こはいろ、めい人で大當り。

▲公きみの乗のりのは、あの御所車、のぼり矢車かざ車、上上ふねに帆車、は組は源氏車、大八車やうし車、いまのはやりが糸車、よどの川せは水車、上上きやりじや棒車、つな手車は箱根山ひかしやんせ。

▲京で辻つじきみ、大坂でそをか、江戸でよたかというげしやう、上上いきは本所、あだは兩ごく、うかり／＼とひやかせば、こゝになだかきおくら前、ひと足あしわたしにのりおくれ、上上よたかのふねときがつかす、あぶなさ、こはさ、きみわるくさを

いれ。

此の流行唄が弘化二年の讀賣りであることは天言筆記に書いてある、苛酷な改革で江戸を戦栗させた水野越前守忠邦が退職して、一年経つか経たぬに夜鷹が或る町々を賑した、其の模様は既刊お江戸の話の中へ書いて置いたが、弘化元年の八月頃から翌年の末まで夜鷹の景氣は凄しいものであつた、弘化二年十二月五日に新吉原が焼けて、深川へ假宅した、此の假宅の繁昌は驚くべき盛況だつた爲めに、流名の夜鷹の景氣も其の方へ奪はれて了つた。

此の流行唄が頻と夜鷹を持出して居るのも、假宅以前であつたから、夜鷹の細見が出版される時世に連れて、如何にも似合はしい、此の時のみならず江戸では折々夜鷹の目立つたことがある。

はうたいよぶし

▲あだなおかほをみた常盤津で、ぬしのこゝろも組太夫と、上わたしばかりが小文字太夫で、ひゞに升のが國太夫、せけん人めも兼太夫で、ゑんのしきさで、そいとげて、上いまでは東太夫で、どんな文字でもいわしやんせ、いとやせん。

▲おふ江戸の町盡し、みちかへきものはお藏前、大つうは通町、いさみで揃はいよはぐみ、はで姿は芝居丁、兩ごくにはんばし、一トきは目にたつ五丁町、夕日にかやく二枚ばし、夜が明りや、田町のしまつ屋のせわになり、親父の目玉がでんぐりかい坂、それからだん／＼糺町。

▲浅くさに名もたかき、雷門が定見世で、とんだりはねたり、替たり、からかさがひつくりかへつて助六となり、一ツながやの佐兵衛どの、四こくをまわつて猫とな

ちりんちりん（町飛脚まちひきやくといつて挾箱はさみはこのやうなものを擔かつぎ、其その挾箱はさみはこの棒ぼうの先さきへ鈴すずを着つけて居かたので、チリン／＼と呼ばれた）とも違ちがふやうだ、「いやわからねへ男をとこだ、あれは錢ぜにがねへので、裸はだかにされてけへるのよ。

とあるのだ、始末屋しまつやを文久ぶんきゅうの頃ころに未まだ知しらない者ものが多おほかつた、それから何程なにほどさかのほ溯はれるかと思おもつて居かたが、是こゝで弘化こうくわには既すでに始末屋しまつやがあつたことを慥たしかめた。

新板すちやらかほこく

▲いなかものじやと思おもふてからに、あんまりなぶつて、くだんすな、これでもおくにゐるときは、お百姓ひやくしやうのごたんせいで、おいね／＼とそだてられ、それからゝお江戸えどへ出でて、へつゝゐがしへとせたいもち、かまやほりからむこをとり、ふうふ中なかよくまゝアとなる。

▲ばんしうたかさごをのへのまつ、としのはじめはかど松まつで、むすめ子こどもは、はるをまつ、おちやひきぢよろしゆは、きやくをまつ、かさまつとうげは、きじんのおまつ、ぬしとわたしはしゆつせをまつ、やがてふうとなるをまつ。

▲中なかものづくしでもふさふならば、おそめ久松ひさまつくらのなか、石川いしかは五右衛門ゑもんかまのなか、みや本もとむさしはふるのなか、あけち光みつひでやぶの中なか、につきだん正じやうけぶの中なか、

あめりか唐人海の中、太刀となぎなたさやの中、ゑびす大こく宮のなか、ぬしとわたしはうまいなか、すちやらかボコ〜。

▲けたうじんじやおもふてからに、あめりかこばかにしやんすな、ぬしをおもへば五千里いちり、はる〜日ほんのうらがへわたり、かな川ぢよろしゆにはまりこみてれんてくだの軍法けいりやく、とふたうはだか外海へつきだされたる、あげくのはては、跡でべるりとしたを出す。

▲よりともさまはふじのまきがり、子どもはくさかり、日なたでし〜がり、ぬしはうつかり人をは〜かり、十三はつかりわるのを、めつかり、おやぢのあたまとめたまがびつかり、しかりちらされむすこはこはがり、しんるゐふさがり、しちをおいてうはがりするのは、これはとうざのくるしがり。

▲かねのそうばは、うめがはちうべゑ、廿日あまりに四十兩、うめがえむけんが三百兩で、うめのよしべゑ七十兩で、あとのたしまへ三十兩で、はるのゆふぐれあた

へ千兩、まをとこそうばが七兩二分で、かんにん五兩とたがきめた。

▲わたしのざいしよは、ゑちごのくにかんばらごほりで、おやぢやかりうど、かさごせのぼう、せなアせつきやう(説經)、しやくじやうほうがい、あねさいちこ(巫女)で、しやてい(舎弟)ふたりは、あさからばんまで、し〜をかぶつて、くるりとまはり、まちやざいこ(在郷)へ、かく兵へにでます、おやのいんぐわで、わたしはくらがへ、つとめが二朱で、はながしし。

▲りやうごくのはしろうへで、おだいみやう(御大名)が、いつかしら(五頭)、これをいち〜たづねてみれば、かみはほんだで、きものはさつま(島津)、おびはちくせん(筑前、黒田)、ふんどしはゑつちう、まへのどうくはゑちせんけ、(福井侯の行列は挾箱へ皮覆ひを掛けたるを先頭に立てる)

▲きれやさんはたけうまで、みそかにうるのがおゑうま(繪馬、荒神様と共に賣に來た)で、みちからまくのがつきうまで、むやみにでるのがやぢうまで、おでんの

○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲主とゆう字に人かんむりが、ハイヨ、あれば、ノウチヨサン、このくろふ、シタコ
タナイシヨ〜。

▲いちやなりとも、このよのうちに、ハイヨ、あわにやくろふが、ノウチヨサン、や
すまなへ、シタコタナイシヨ〜。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲よそへねてきたはをりのしはを、ハイヨ、なおすひのしの、ノウチヨサン、あてこ
すり、シタコタナイシヨ〜。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○。

▲としがちがうと、ねこめにきけば、ハイヨ、にやう〜と、ノウチヨサン、もふし

よこにしな、したこたないしよく。
 おさんなにをする、あんどのかげで、はんよ、してもしたがる、のふ千代さん、
 いねむりを、したこたないしよく。

わたしの心は、かやぶきやねよ、はんよ、かわらないのが、のふ千代さん、よい
 なアかよ、したこたないしよく。

此の唄を畫入にして一枚繪になつて居る、林氏の話に此の唄は文久四年に流行した
 と聞いた、武江年表に據れば、文久三年六月頃から中澁谷の千代田稻荷がはやり出し
 たといふ。此の稻荷は今日も宮益坂の中腹を北に切れた横町にある、祠の前に不相應
 な大賽銭箱がある、箱の正面に奉納猿若町中村座茶屋中出方中とあつて、左側に文久
 三年癸亥七月吉日とある、これが武江年表の記載を證明する物である。唄の中に千代
 さんといふのは、此の稻荷の事なのであるが、抑も此の稻荷の流行し初めたのに就
 て面白い話がある。

御本丸一の側に御用掛の御年寄で瀧山といふ、大奥第一の權勢者が居た、總ての女
 中は孰れも瀧山の支配を受けるのであつた。家茂將軍の生母實成院が酒飲みで、其の
 召仕女中も不規律であつたから、瀧山が察度を加へたのを怨んで、將軍が文久三年二
 月に上洛された、其の留守中、十二月の某夜に瀧山の部屋へ放火した。其の時に誰と
 もなく瀧山さん火事ですよと云つて起した者がある、起した者は千代田稻荷だといふ
 評判がバツと擴がつた。實は放火した者が自分で驚いて、思はず聲を上げたのである
 が、迷信家の多い大奥だけに、遂に千代田稻荷の御利生になつて了つた。津村綜菴の
 譚海にも、小傳馬町は千代田村といひ……常盤橋の内に千代田稻荷とてあるは、小傳
 馬町より移し祀りたる也とある、其の後に中澁谷へ移したのである、郭中にあつた稻
 荷であるから、長く柳營を守護するのだと云はれて、急に千代田稻荷が繁昌し出した。
 瀧山も代參を立てる、一の側の女中が揃つて奉納をする、瀧山の部屋に居た女按摩の
 ころが、當夜の光景やら千代田稻荷のお告やらを、表使の筆頭であつた小山といふ女

中に話し、小山が大層肩を入れて大奥一般の騒ぎになつた、そのみならず、こうは魚河岸出生の者であつたので、話は河岸の連中に傳はり、忽に民間の迷信を煽ることになつた。

儲瀧山の部屋のは火事は、早く目が覺めた爲めに、大事に至らずに消し止めて了つた、火を放つた女中の罪科は内分にして、唯だ御暇といふので息を附けた、これが唄の播しに、したこたないしょくといふ譯なのである。當時は騒しい忙しい世の中であつたから、千代田稻荷も一兩年で忘れられて了つたが、流行唄のはんよ節は稻荷よりも長く流行した。唄の中の稻荷鮫は天保五年頃からある、天言筆記に去る巳年(弘化二年)十月頃より稻荷鮫流行せり、本家は平永町にて筋違内へ出る、「ごぞんじのいつでも爰にいなすし、ますく賣れる丙午(弘化三年)どし」とあるが、弘化三年に稻荷鮫が創製されたのではない。この時は稻荷鮫が冴え返つたのである。

來ル和十二ヶ月都津千里登舞

正月

▲一夜あけたるくるのはのけしき、常に悪みし鳥のこゑ、にくうチツセン初鳥、内へむけたる松かざり、是からお客を松のうち、移香残す梅のはな、客はにつこりふく壽草、常にふくれるやりて衆も、笑ひがほする三ツの朝。

二月

▲客はくるはへサテ二月の其はつ午のきはひに、とんだお穴へ御參詣、けふも稻荷と居つゞけに、たいこ藝者にはやされて、よいにはどんく大さはぎ、夜中にすがたを見うしない、又狐めにばかされて、客の狸がぐちをいう。

三 月

▲こゝろうはつく彌生の初め、仲の町の風景は、十軒店に事ならず、いきた雛様見
 るこゝち、是はくくと夕ざくら、日もくれないの色ざかり、客も酒く花もさけ、
 ♪櫻のはなは散ないで、お客ははなをちらせます。

四 月

▲土手の柳ももふ葉柳に、すかた見歸る衣紋坂、なをしてくぐる大門も、心卯月の
 うてうてん、うそを月夜の里へ来て、てつべんはげた人に迄、ないてだませしニツ
 星、ほしがないたかほとゝぎす、なんだかそらでわからない。

五 月

▲逢ふて嬉しきサテ柏餅、しつぽり逢ふた餅の肌、月がたまつて夜をふかす、なんぼ
 五月雨づきじやとて、ふられてかへる人も有り、しつぽりぬれてくるも有り、せう
 ぶがついたとこの内、戀にのぼりは有るけれど、せうきは一人りも見へませぬ。

六 月

▲いきな姿をサテ水無月と、人もこぞつて北の里、げにや和朝の女護島、隅田川原
 はなんのその、すみ田川でも流でも、此かはたけも流の身、さてもすどしき八文字、
 ♪かほど清きふうぞくを、なせどろ水といふだろう。

七 月

▲けんぎうしよく女のサテ星祭、北の里なるニツ星、(谷入山形にニツ星は遊女の最高
 級者のしるし)七夕さんではなけれ共、笹に一夜を呑み明し、左右の茶屋をなが

むれば、玉菊さんの来る夜とて、みな茶や／＼の思つき、
は、とぼす取持するゆへか。

八月

▲比良の暮雪にサテ事ならず、げに八朔の白重、ゆきの肌へに雪を着て、
と茶屋廻り、ふるへつくよな風俗を大盡たちが是を見て、ゆきころがしをいたさん
と、
と、
と、

九月

▲九月九日のサテ約そくに鷹のたよりか、北里の返事を菊の節句より、
札をかけ、團子のよふにまるめられ、かきかくりかじやなけれ共、しぶけのぬけた
風ぞくに、
風ぞくに、

十月

▲神無月とはサテいながら、出雲にまさる五丁町、縁を結ぶのふくの神、大黒さん
ではあるまいし、おほ穴さきの御みこと、打手の小づちは、なけれども、多くの寶
まき散し、あいたいみたいといふたいは、里のゑびすに釣りこまれ。

十一月

▲化けて客とるサテ二丁町、(猿若町)、ばかして客取る五丁町、(吉原)、何れもさいうら
表、役者ぞろいに玉揃、日に千兩の捨處、顔見世づきがよかるふと、たいこ持のま
く引で、つい引こんだところのうち、しばらくすんでだんまり場。

十二月

▲年の暮でもサテ別せかい、氣らかな人のくるわうち、是でも暮かと思ふよふ、うはき者めが、年忘れ、淺草市じやの、すゝはきのと、さて色々にかこつけて、目こと夜毎に青樓へ、かまわずふけるむす子をば、内では餅について居る。

江戸では吉原を意氣な處、粹な處と解して居た、醜業地域といふ睨みでは此の唄の興趣が請取れぬ、無論オイランといふものをも醜業婦としては決して解釋されない、故に吉原とオイランとは現今の人々に諒得されないものである、藝者よりもオイランの方が戯れ憎く、狎れ難かつた、品性識見は全く良家の妻女と違はない、或はそれ以上の資質を持つて居た、今日の若い人のいふ娼婦型は、見ず點藝者がバアの女などの私娼風體で、昔のオイラン型ではない。

此のトツチリトンは弘化以後に作られたものなのは、芝居が猿若町へ移轉して居る、十一月の文句で知れる、恰も其の頃の吉原へ浮れた我等の祖父から、或るオイランが客を茶屋に迎へた席で待つ宵を焚いた、さうすると客は直ぐに歸つて了つたといふ話を聞いた、何と云つても待つ宵を聽ける客が通つた、來て居る客の前で待つ宵を焚かれては、他に待つ人があると思ふのが當然だ、面當てをされたと知つたから歸つたのである、香を焚いても何だか知らなければ、好い臭いと鼻をヒコ／＼するだけで手強くフラれたのも知らずに居る、遊女の方でも何を焚いても知らずに居られては晒落にも風流にもならぬ、だが其の時は全く香を間違へて焚いたのだといふ、なにしても其の位の心掛け嗜みもある人間が居ますれば、通ひもしたのであるから、中等以上の娼家では半天股引の江戸ツ子連中を上げなかつた、若し登樓しても彼等には面白くなからう、昔の洒落者は吉原の遊びは極り切つて居て窮屈だといつて、品川や新宿の宿場女郎を氣儘がつて興じたといふ、女郎買が窮屈だといふ話も現今の人々には妙に聞かれやう。

よし原八景とつちりとん

▲ぬしはつばみのサテ花川戸。

手くだあいづのよし原で、京まちかねてこなさんを。

上 江戸町かけてうらちややも。

やうくさがしつきとめて、これでこゝろもすみ丁と、ちよつとちややからあげや
丁、こよひ大もん、わしやうれし。

▲ぬんはつきせぬ五丁町。

▲すへはめうとにサテなり平と。

かたくちかひし中のがう、ぬしのくるのをまつち山。

上 あふてはなしをいをざきと。

むりなくせつをしゆびの松、ちよつと見そめしみめぐりの、しいの木やしきすみだ
川、ほんに人めのせきやにて。

▲まゝにならぬできがもめる。

▲ぬんのはしばがサテあるならば。

すへはつまぢやとまにうけて、すへのすへ迄そうせんじ。

上 ぬしはあきはのうすもみぢ。

まつにこんめときくもいや、あふてわかれもうし島の、わざとなげたるまくらばし、
なかなをりして大はしと。

▲うれしのもりや梅やしき。

▲ぬしのくるのをわしやまちかねて。

ひとよあはねばぐちになり、あふてどうしてかうしてと。

上 ねるもねられづものあんじ。

うかれがらすも思ひぐさ、あへばうらみもうちわすれ、したになる手のじやまになり、かみもけしやうもねみだれの。

〽はづかしいほどうつゝなき。

〽たとへしうとがおにでもじやでも。

ほれたおまへのおやじやもの、あくまで添ふと思ふのじや。

上〽それにおまへはなんじやかじや。

わたしやとうからみやうとじやと、ゆびをりかぞへて、たのみじや、さあそうだんじや、よめ入じや、しうぎじや、目でたじや、さかづきじや。

〽ざしきがひけじや、床入じや。

〽〇〇やつくくサテふねがつく。

ふねにやろがつく、かいがつく、評ばんしばるにや木戸がつく。

上〽いざりのきん玉にやすながつく。

だんなおいでにやともがつく、とものこしにはべんとつく、べんとのあとからいぬがつく、しつづくとりつく、くらいつく。

〽くらいついたらあとがつく。

巷街贅説こうがいぜいせつに今年天保四癸巳こととしてんほ みづのえみどしきさらぎの頃ころより此流行このりちかうあり、寛政くわんせいの末すえの頃ころ専ら流りゅう行かうせしトツチリトンとひきたるうたの焼直やきなほしにぞありぬとある。

て、ゆびをついたか、べらぼうにふくれてやめにする、てうど三日になるけれど、
まだほころびができぬ。

▲うらやしよかいで、まことをみせる、うまいしうちに、ぐうつとはまつたふりで、こ
ろねを、しめてならさぬはらづみ、ひけたくふうをとこのうち、どうしてだ
ませくれやうと、ひとりねていてかんがへる、せうじをのぞくふるぎつね、おき
やくはたぬきで、そらねいり。

▲ほかにます花あるとうはさ、けさもらうかでぶつりと、きれたはなをのうはぞ
うり、もしもゆふべのことゆへに、これぎりあわれぬしらせかと、おもへばいつ
そきにかゝる、せめてきげんをあさなをし、とめるをふりきり、そこはなせ、い
へくやらぬと、めになみだ。

▲月のさらしな、うつるは田ごと、手ごとへまことにひつかう、よごと日ごとにかよ
ふきやく、ねてのむつごと、ぬれごとは、ないしよへしれては大ごとさ、それこそ

まことにほうばいが、あてこといふのは知れたこと。誠でないとはむりなこと、
お部屋のことはむだなこと。

▲うらがくにさのいろごとばなし、きいてくらしよいあにやさん、にいがた女郎衆
にはまりこみ、しばた五萬石あらそとまよ、おかくほんねくよきのよも、
ふからくとふとらでかよひ、ねんさあけたら、よめ女にと、やくとくまでもして
おいて、あじよにもかせうにも、しよことがねへ。

▲いそがしいぞへ、おまんまたきも、としに二兩か三兩で、たすきはづさずかまのま
へ、めしのふくまに、みそをすり、それからおちやをほうじたり、ないしよです
やした、そのひまに、火をひきわすれて、こげつかせ、てうどだんなが目をさまし、
くさいといわれて、あかくなる。

▲なすはぢぬしで、おとなしけれど、たながりあまたあるなかで、かぼちやが、いつ
でもはいかけて、からみつくのをふりはなす、ひやうしで、たなからころげだし、

はたけへおちてめをまはす、すてゝもおかれずげんぱくか、いぼやほくろじや有ま
いし、八ッほうさんをのませ升。

都々一坊に五代ある。初代扇歌は坊といふに相應せる坊主頭であつた。それは嘉永
五年十月二十九日に歿した、二代目は咄家都川歌丸の後家で、都川歌女吉といつた者
だ、婦女のことゆる坊とは云はず、弘化の頃でもあらう、都々一扇歌といつた。三代
目は跛の扇歌、是は坊主であつた、四代目は明治十六七年頃と思ふ、東家小満之助と
いふ女が襲名し、五代目には大坂傳馬の真中といふ唄で賣り出した柳家つばめがな
つた、此の襲名は明治三十年頃であつたらう。

扇歌は都々一を以て知られた、彼は又たトツチリトンにも獨創があつた、彼は寄席
藝人だけに即座三題話の趣向を奪ひ、客から題を貰つて頓作のトツチリトンを活用し
て謎解きを演じた。是は寛政の謎解坊主春雪を繼承したのでなく、當時流行の三題話



紙表るけ描を歌扇坊々都

からの思ひ付らしい。此の冊子の表紙に被布を着た扇歌の姿を描きながら、却つて彼の特色ある唄を出してない。

越後訛を集めて御坐興にしたのは、江戸で地方の人を嘲笑する第一が其の言葉であつたのに投じたのであらう、ヤツチヨル／＼にしても、遠國他國の鄙言を侮蔑する意味で、玩弄するに過ぎぬ。

おまんまたき、武家にはない、孰れも町家の稱呼であるが、町家にしても下女で通つて居た。飯焚を僕と稱し、おまんまたきを娼と稱するやうになつたのは、何時からだらうか。

しん板大つゑぶし

▲世の中のたわけ物、おもしろい事たづぬれば、吉原のあさがへり、のろけ咄しのは
ぢまりは、もてた方から咄し出す。角力見物にのりがきて、きせるとやたてをまち
がへた、あんまの口論つかみ合、その中へ、どもりが仲人にはいります。かなつんば
ふの内せう咄し、おゝしのやきもちけんくわはおかしかる。

▲借金のさいそくは、まつびら御免の大角力、いつでもことばを、あら馬に、いわれ
てきん玉が劍山、此せつくめん山がわるいから、かゝあの鏡岩に小柳の、おびもし
ち屋へ追手かせ、雷でんまで柏戸としやれられて、腹をたち、そんな不實としらぬ
いで、晴天十日のやくそくを日の下開山にこまり升。

▲女湯の、ばんとさん、たからの毎日見あきする、あだな娘は、芝居の咄、しうとは
どあは、よめのうわさする、しやべるは長屋中で金ぼふひき、せじのよいのは中ど
しま、三味せんのお師匠さんにかこいもの、お三どんのはいるはしまひゆで、五ッ
(午後八時)をうてば三助どんに、ぬいてはいやだとすがり付。

▲なくつて七くせといながら、廓の人々のくせの内、女げいしやはおじぎをよこ
にする、たいこもちはおつな身ぶりをいたしました、どうでこせへすといふがくせ、
やりてはむやみにもらいたがる、女郎衆はしんじつほれたとそらなみだ、お客はか
へるときに、ばんにくる、若衆はそんならおちかいうちにといふがくせ、此頃せ
けんの人々が、わらかしやアがる、おあいだといふがくせ。

▲世の中にうれしいものは、大きなむじんを初會にとりまして、いそいでもどる、く
らやみで、黒ちりめんの頭巾をひろいまして、あけて見たれば金がある、百兩づゝ
みが三ツ出た、いたゞいて歸る道すがら、いきな女と道すれに、成まして、おくつ
て向の内にゆき、ちん／＼かもの酒もりすんで、寝よふと思つたら夢であつた。

▲江戸市川の海老藏は役者の、その中で、親玉と一世一代の御なごり、かぶき狂言の
かんじん帳、上方かけても、ひやうばんは、義経公と伊勢駿河つゞく龜井は成田屋
と、つたわる七代八代目、辨慶が出家のすがたに成つねで、ゆづる三升は家のかぶ、
目でたくおさめてあんしん帳

七代目が海老藏と改名して、倅新之助を八代目にしたのは天保三年である、一世一
代の勸進帳は嘉永五年五月河原崎座で開演し、十二月に上坂した。
わらはかしやがるお間は安政の流行言葉だ、此の唄で見れば嘉永の末には既に云ひ
囃して居たらしい。

江戸の花向島八景大津繪ぶし

▲兩ごくの夕すゞみのきをならべしちや屋のかず、ようきうば、うちはみせ、其ほ
かさまぐのあきんどみせ、川のなかのかげしぼる、うろくぶねにばかばやし、
やかたやねぶね、そのなかでたまやかぎやはではなび、ぼんくくあげりや
はしのうへでは、すまんのひとつのこへ、上むしうり、むぎゆにすいかのたちうり、
こをり水ひやつこいに、ほんけからす丸(枇杷葉湯)、

▲三丁まちひようばんき、しよさでは、いつでも成こまや、八代めいへのかぶ、と
うじは日のでとはやります、むすめでは糸三郎、おばけじや菊五郎、いつでも中
りはやがはり、じだいは彦三に、たて多見藏、おやまではしうかに、梅幸菊次郎、
上かたきは芝十、ぬれごとは羽左衛門、九藏にきのくにや。

是で見れば大道へ出る麥湯が多くなつたわけではなく、麥湯の女といふものが問題になつて來たのだ、それ故に町觸の末段に、

麥湯商賣の類往還へ夜分罷在候ものは、一般に四ツ時(午後十時)より追々相仕舞、九ツ時(午後十二時)限り引拂候段、店前の者并家主より心附、廣場等は見守いたし候町守より心附申すべし。

と營業時間を制限してゐる、麥湯の女は東京の初までも夏の夜の景物であつた。錦繪にも其の風姿を描いてある、爲永春水も英對暖語の中に書いた。

江戸の遺老で四世廣重を繼いだ菊池貴一郎翁の江戸府内風俗往來に委しく狀況を傳へてある、夏の夜、麥湯店の出る所、江戸市中諸所にあたりたり、多きは十店以上、少なきは五六店に下らず、大通りにも一二店づつ、他の夜店の間に出でける、横行燈に麥湯とかな文字にてかく、又櫻に短尺の畫をかき、其短尺にかきしもあり、行燈の本は麥湯の釜茶碗等あり、其廻りに涼臺を並べたり、紅粉粧うたる少女、湯を

汲み給仕す、浴衣の模様涼しく、帯しどけなげに結び、紅染の手襷程よく、世辭の調子愛嬌あつて、人に媚びけるも猥りに渡ることなきは名物なり、麥湯櫻湯くす湯あられ湯の外に、菓子などはなく、又茶代多からずして、涼風餘りあるより客絶ゆることなし、夜たけるまで店を出したり。

此の麥湯で此の唄の年代は知れないが、最後の雷ごろくの中にも名倉へ通ふとあるので、安政地震後のものなのが知れる、千住の接骨醫名倉が著名になつたのは、地震の怪我人を治療してからだと聞いて居る。

おやまのふじ娘、ざとふのふんどしお犬くわへて仰天し、つへおばふり上げて、あらきの鬼もほつきして、かね、しゆもく、ひよふたんなまづでおさへ升、やつこのぎよふれつ、つりがね辨慶、矢野根五郎。

▲あたま、ひたいぐち、こめかみ、まいげにめのく玉、はなばしら、はなの穴、口下おとがい、みゝたぶね、ほふべたにほんのくど、ゑりすじにあごのした、せなかにかた、かひな、うで、ひじ、力こぶ、みやく處、のど、むね、ちゝ、へそ、よこつばら、こしのほね、しりこべた、おめ〇、せがれ、両もゝ、ひざがしら、向すね、かゝと、土ふます。

▲吉原七ツふしぎ、おゝもんあれ共、げんかなし、お茶屋では茶おうらず、かしはあれ共船つかず、おしよくとゆふけれど、誠にこじよくで、子じよくといつてもたいしよくで、サテゝやりてといわんすが、とるばかり、七八十の人さへも、くるわのならいと、ふしぎな事にはお若衆。

▲おゝイゝゝ定九郎どん、このかねおまへにかしてあげよ、定九郎仰天し、いエゝゝおかねはいりません、てんとうさまみてござる、めうりがおそろしい、おさきへさんじませう、サテゝりちぎな定九郎、此かねりそくもなんにもいりません、つごうのよいとき、おりゝすこしもかへしやんせ。

▲おゝイゝゝ肴やさん、其かれい、こつちへかじまぐる、よいひらめ、たいもあり、いしもちかにはこあじ迄、むつの子としたびらめ、よふゝとかつてきた、おかつほ、さんまじやへ、はせゝゝ、芝ゑび、なまだことぶり、はまち、あんこ、くるまるび、しとすゝき、石なぎ、かますとおんあい、わかなど、てつほうふぐ。

おほつゑもんくさいようおほおほつゑりうかうきはぶんきういご
大津繪の文句を採用したものが多く、大津繪が流行を極めたのは文久以後であるから、此の端歌は元治慶應の作だらう、又た島屋の番頭のことば俗謡中に屢々見えて居る、是は弘化二年の暮から、市中の子供等が、島屋の番頭尻掘番頭、小僧は難儀、早

桶だんノウ、丸焼だんヨウと口々に云ひ囃した、其の事は藤岡屋日記に。

天保十五年正月五日の事なるよし、小傳馬町一丁目に島屋吉兵衛といふ呉服屋の番頭上州者にて、小僧の後門を男色致し、小僧氣絶せしより、宿より六ツケ敷掛合、金子にて事済みたるが、番頭は暇出さる、其番頭後に吉原川津屋へ住込みしが、此度の火事(弘化二年十二月十五日)京町二丁目河津屋鐵五郎方火元にて、廓中全焼にて丸焼になりしより謠ひ出せしなり。

とある、童謠の流行に依つて毎日島屋へ番頭の見物が群集して營業に差支へる有様、已むを得ず暫時閉店したといふ、それ程の大評判であつたゞけに其の後も斯うした俗謠の中へ島屋の番頭が出て来る、實は好い戒飭であらう、明治大正の御代にも馬鹿者はある、斯うした戒飭を加へる必要を確認させる人物も慥にある。

新板厄拂

端唄盡し

○ア、らめでたいなく、一夜明れば春がすみたなびくそらのひきぞめに、いきな端うたのつめびきや氣もはるさめに鶯のはつ音一ト聲めぐる日のあだな笑顔にうちこんで、ほれてかよふもながきよの下からよんだ文のあや、おもてにうたふ一トふしも、もしやぬしかと三下り、かむろで、見や、うば玉のよるは寝てさへ思ひ出し宇治は茶どころ、さま／＼におもひまわしたものあんじ、うき川竹のこの身でも、うそはないぞへ本てうし、どふかしゆびして大つゑも、一中くづしおたがひにしれぬが花、八重一重いつか穂にで、あらはるゝ、そのかほつきのかいあんじ、雪は巴とふりしきる、びやうぶのうちのむつごとに、ひと目のせきをしのびごま、ちん／＼

かものさいちうに、いせをんどでおどりだし、さまたげなさんとする所を、てんぐれんのはなばしら、やぼのむれへさらりく。

蕎麥づくし

○ア、らめでたいなく、またあら玉の新そばに、御祝儀めでたき手打そば、親子なんばん、中もよく、めうとはちんくかもそばで、くれるとすぐにねぎなんばん、上から夜着をぶつかけそば、たがひにあせをしつぽくそば、てんとたまらぬ天ぶらそば、かけくさんへあんかけのそのごりやくはあられそば、やがてお産の玉子とじ、あつもりおいてそだてあげてふよ花まきもてはやし、かゝるめでたきおりからに、あくまうどんがとんで出、やくみからみをぬかすなら、大こんおろしでおろしつけ、したじの中へさらりく。

軍書讀名よせ

○ア、らめでたいなくめでたい春のおとぎさ見てきたやうな戦場も實からでたちやり滑稽、貞林ひらく北梅にやどる南鶯、石川のながれよどまぬ一夢に一口、お門にたてり松林亭は太疏りうぎをうけつぎて、めでたく爰に伊東派は、燕凌ゑきやくかうしやくの秘事は、まつげの長久手に小牧山崎、貞山貞生、きつねのいのり南龍が、尻尾を見せぬ、化のかわ、當春席のよみはじめ、惠方にむかつて十面がほ、だんく聲をはり扇、七種なづなの拍子と俱に、せきはらひしてすとんく。

さかづくし

○ア、らめでたいなくさかづくしにてはらひませう、一夜をあけのはるくと霞が關をのぼり坂、江戸のきせうのきほひ坂、とそでおかほも赤坂で、扱うつくしいび

なん坂、むすめざかりの貝坂を、みんなもらひにくるま坂、妻戀ざかりの若木坂、しきりに男をもちの木坂、それからまもなく子持坂、川の字なりにねぶと坂、つく家名は長坂で、ながれつきせぬしみづか、坂に車のゆだんなく、かせぐは神のひじり坂、あくまうげどうのかつばざかが、とび坂來つてじやまなさは、此わたなべのつなざか、坂の上からまつさかさまに、からかさ谷へさらりく。

上戸づくし

○ア、らめでたいなく、あら玉はゞき新川に下戸のたてたるくらはなし、上戸のはらへ入船や、酒はうれひをわすれ水、徳利といふも、百薬の銚子さかづとりそろへ、笑ひ上戸のむつましく、その身につゝがなき上戸、はらたち上戸も一ト癖の、なくて七くせ一合上戸、けちく上戸の小なべだて、升のすみから立のみ上戸、かんしやく上戸のあをつ切、たらふく上戸ののんた郎、あとひきじやうごのすぶろく

に、こなから上戸の彌太市まで、そろふ上戸の大一座、さいつおさへつするなかへ、あくまげどうのおにころしがとびこむ、のみものみなかま、さしてくれろのやけのみ上戸、大さかづきでがぶりく。

松づくし

○ア、らめでたいなく、めでたいまつは三がい、ひらくぶたいのこまつひき、げに高砂の松のいろ、老松も常盤のみさほ太夫職、それからさきの一ツ松、春の夜ながくきみをまつ、千代に八千代もから松に、しなだれかゝる女夫松、かほにいろざすあかまつも、潮干にぬれてはまの松、みどりのいろや若松を、だいて寝まつをそねの松、くれうちからはるをまつ、れんりの門松、ねびきのまつ、やうきなこゑでまつやく。

明治の十七八年頃までは年越の夜の點燈頃より、御厄拂ひませう厄落しといつて來る、それを呼び込んで餅に錢を添へて與へれば、アーラ目出たいなく、今晚今宵の御祝儀に目出たいことで拂ひましよといひ、是から魚盡し青物盡しなどがあつて、未は必ず西の海とは思へども、此の厄拂ひが引執らへ東の川へサラリといふ、其の文句に一種の調子があつて爽快に聞かれた、江戸時代には節分、大晦日、正月六日、同十四日等に來たさうである、世間に善く馴染んだものだけに、江戸の落書の中には厄拂の文句を摸倣したのが澤山ある、それも例の調子から來る興味を伴つて面白く聞かれた、此の製作は講師の名寄から考へて、大分文久度であらうと思はれる。

年越の夜の外に厄拂の來ることについては、後見草明和九年の處に、或年(是は寶曆九年のことかと思ふ)御城にて取趣有とて、冬至の夜、豆をうちはやし候事有之、其節厄拂ひ參申候、冬至の夜、大晦日などにも近頃厄拂ひ參り申候、柳營での厭勝から民間一般の習ひになつたのであらう。

風流ばうた富本外題

上

▲是は名だかき富本の名よせ、あさま、むしうり、くらまじ。

上 〽すまのおし鳥、たかをさんげに、瀬川ぼうしに、よしつねと、おしゆん、白ふじみがはりに、おなつ清十郎や梅川も。

上 〽こひの飛脚道行、小ひな半兵へははですがたならわんせ。

▲戀の手とりは、あのはるごまに、おはん瀬川のあだなみや。

〽みやこ見物さいじきもみぢ、おみは、戀のおだまきに、きつねたどのぶ、たまかつら、よたかは夜のはなすがた。

〽じやうりせかい、しんたかを、おつまはよひの四ッ辻で人の山。

▲こひのくせもの、いたづらがみと、四季のながめも三ッ大で、
 上々おきく幸助、おそめ久松、おはな半七、はまちどり、あめの柳につり狐、はるの
 すがさみ萩すゝき。
 上々なつこうだちに六ッごと、うきなによつぎひくせたい、ちりのこり。

下

▲まいりまいらせゆかりの月に名だいのしつるべずし。
 上々しん中廊の水をあげには、ならのみやこの妻子鹿、四十八たて五人づれ、なには
 かゞみに竹のその。
 上々くさかりかぶとぐんきに、いろのおだまきいせの旅はなし宿。
 ▲白井権八あの小むらさき、まつと梅かや、ゆひわたに、
 上々しうぎ老松きつねたどのぶ戀中車初音旅、かれないことぶき九段目は、おや子の旅

の山科に。

上々行平いその松風五ッかりかね、うばかやは一ッ夜に。
 ▲かぎやうなりやこそ、あのだいだうを、かさをきないが、きゝみちと。
 上々越しでなるかんしよさいないぎの、あつけはらふて妙薬と、馬喰丁には新右衛門
 丁、どれが元祖か、たれ一人。
 上々しらす、ほんにうりきる外は、四ッ谷の坂丁にうりまする。

文久度の出板らしい、屋敷地から稽古に通ふ者が多い、お嬢様と云はれる者も師匠
 を呼んで稽古するのであつた、富本は明和以來の流行であつたが、最初とは大分模様
 も變つたらしい、後見草明和九年の處に。
 富本豊前太夫と云、淨瑠璃語り流行、所々の娘子供、此ふしをかたり候分は、櫻
 草の紋所をつけ、髪を切て若衆にたばね結び候者數多有之。



のもたせ見を口入の席寄

瓦板の流行唄

二五六

さくら草はちひさき草にて、三月のころ三錢位に賣歩行し處、近頃は櫻草殊の外流行、種々の花形色あひなども違ひて、珍らしく一二尺延び候由を、花壇に植ゑ、鉢に植ゑて、權門方への贈り物に相成、此節田沼主殿頭殿屋敷には數百種有之由とある。

新板世の中おもしろぶし

都々一坊扇歌作

上

- ▲いとおもひは、わしや升ますなれど、はかりがたなきひとごゝろ、はかりを大事にし
やさんせ、コノヲモシロヤア。
- ▲ばんに のぼど、うらからしのべ、おもてくゝりどでおとがする、であいを大事に
しやさんせ、コノヲモシロヤア。
- ▲おまへほうてう、わしやまな板いたよ、きるにきられぬ、みのいんぐは、世の中大事に
しやさんせ、コノヲモシロヤア。
- ▲るすへしけこむ、あのまめどろぼ、ていしゆしらすに、にほんぼう、によふぼ大事

新板月雪花撰文句どゞいつぶし

- ▲よふくしのびあければらんまがしらむぢれてかみきるふさよふじ。
- ▲まゝならぬ世とあきらめてもかほみりやぐちをゆうて心でないている。
- ▲あつい御げんにまた御いけんもきゝいれましたがきれられぬ。
- ▲戀やみでしよくものんどへはとふりはせぬがくいつきたいのはぬしのかほ。
- ▲いつゞけのつもるはなしにけさしきかへてやのしきへのたかいこと。
- ▲にくい人だとくちではいへどぢつはいのちもいとやせん。
- ▲ないていずともふみでもかいてともたちをたのんでよぶがよい。
- ▲ともたちよふたのめばみなうはのそらくきはあれどもぢつはない。
- ▲しみぐとだいてねもせではたからせかれ。

しん内 どこにどふして、いさんすやら、人のうはさによしあしを、きくにつけても、きぐるふは、つのりくしてしやくとなる、

〽とがない子しよくにやつあたり。

▲あきのそらかよ身をさらしなの、

しん内 〽うつりやすしよ木はもみじ、

くもなくはれて月のゑん。

▲ふかくなるほどたがへのこゝろ、

しん内 〽はだとくはしらゆきのとものにきゆるもいとやせん、

つもるおもいもねてとける。

▲木になる此のみをまた白梅の、

しん内 〽あいたみたさがとびたつばかり、かごの鳥かやうらめしや、

せめてはつねをたのしみに。

- ▲しのゝめにわかれせわしきみをくるすがたきりがじやましてまゝならぬ。
- ▲としがちがをが女房によぼが、あつとじやふをたてずにおくものか。
- ▲きゝわけぬいかに年はがゆかぬとゆふてほかにおとこのないよふに。
- ▲きゝわけましたがわしやきられぬたとへなわめにかゝるとも。
- ▲ほつとためいきなみだとゝもに、
しん内 なんのいんがでこのよふにいとしいものかさりとは、
ド、二〽身につまされて一とりごと。
- ▲おろすわさびとこいじのいけんきけどきくほどなみだでる。
- ▲はだとくゝをだきしめおふてこふもかはゆるくなるものか。
- ▲おもいだしはたでぢろりとかんづけられてはづかしそふにかほにそで。

堀田甚兵衛記に『天保の初、謎坊主といふもの出て、聞く人より何と題をいはせ、

即座に是を謎として解きたるに、一風なれば分外に流行りて持囃されたれども、元是
席上の一興長くも續かず、終にどゝ一といへる騒ぎ唄の三味ひきてうたふ、是も深き
事にもあらざめれど弘化の今もどゝ一坊扇歌とよばれて衆評をするもふしぎの一ツ
也』とあり、トツチリトンの處で云つたのと参照して貰ひたい。

おのゑの松夫婦ど、いつ

上

- ▲花のゑがほでみさほのまつのいろもかはらでぬしのそば
- ▲とふざかるのはすへさくはなよひとにさくのはちりやすひ
- ▲よへばつもりしうらみもいへどさめてうれしひうめのゆき
- ▲ぐちもいふまひりんきもせまひひとのすく人もつくはほう
- ▲わけをいふのにマアきかしやんせいやでわかれるきではない
- ▲ふかいちぎりをかはらぬねがひひとのうきなをたつみかせ
- ▲かるひせたいに重荷おもににわたししよいとげられぬときにかゝる
- ▲ふけばとぶよな玉たまやのみでもあはぬつらさのものおもひ

▲きゝわけがなひとおまへはいはんすけれどきれるかくごでほれはせぬ

下

- ▲きれたとうざはがまんもいへどひかすたつほどおもひだす
- ▲あげてきかねはおきやくがたこかつとめもいとめもつけてゐる
- ▲なひてたもるなとはうにくれる月はくもまのほとゝぎす
- ▲はるのはつひののどかにさしてのむはめでたひとそのさけ
- ▲にはのゆきまのあのうめさへもかんくをしのひで花がさく
- ▲花ももみぢもモウあきらめたぬしのたよりをまつばかり
- ▲せけばやむかとおへやのこごとおちやをひくにはましである
- ▲なけばまことゝおきやくのこけがいろのしおくりしまひふだ
- ▲おやのきにいりわたしもほれるいきでりちぎな人はない

あさ直しおつこち都々一ぶし

上

- ▲おつこちをかへして、おへやでせかれ、とがないこじよくにやつあたり。
- ▲井戸よりもふかい心をぬしや汲上て、茶にすりやわたしもあつくなる。
- ▲なみだではげしおしろいなをし、つらやうきよのせぢわらひ。
- ▲さきで秋かせふかせるならば、ちれどおもいのねをのこす。
- ▲信田しのだの森もりといわしやんしたが、しん内しんないたづねたづねこいとのことかいな、さすればきつねかしらねども、まよはするにもほどがある。
- ▲うき世のぎりに、わしやからめられ、かわいや、そなたを人にそへ。
- ▲ぬしゆへにしよくものどへは通とほりはせぬが、くいづきたいは、こなさんお。

- ▲あを木ばにもへたつほどに、わしやあつくなり、ぬしはかたぎで火がつかぬ。
- ▲にはの井づゝのかよいのつるべ、とほりすがりてしらぬふり。
- ▲山できられて火せめにあふて、常盤津とこひらわが本ほんしよの櫻木をじやけんのおのにかゝりしぞや、すへはことなり、たどんとなつて、いやなきやくにもだきねをされるぢやないかいな。

下

- ▲戀に心もむすばれおふて、しん内しんないほとけもやらぬうつとりと、眠ねむればおまへを夢ゆめに見る。
- ▲むめに手がありや、やぶうぐひすも、あだなはつ音ねをだすわいな。
- ▲あづまおとこになぞかけられて、とかぎなるまい、しゆすのおび。
- ▲鳥ならばちかくのさとへすをかけをいて、こがれてなくのをきかせたや。

- ▲わたしや上田で丈あるけれど、ぬしは茶しまできれやすい。
- ▲には鳥がこくびよかたげてしぐれにうたれにのあしふみくしあんがほ。
- ▲しうをそむいてまたいゝわけお、清元〽それよりわしがいやならば、ひとりみらいへいつて見や、男心はそふしたもののか、〽袖にすがりてなみだぐむ。
- ▲はかないとゆふて見あはす朝がほさいも、はなれまいぞとからみつく。
- ▲ふゆのかつばと中さん女郎衆は、ひくにやひかれづおつこちよ待ではないかいを。
- ▲わたしの心をぬしや白菊で、新内〽あんまりきづよい男山ひやで有うとせうちうしてこゝろなおしてくださんせ、ことば〽イヨくとしまやむまいぞ、おやく十六や十七でとしまやとは、ハテそのわけは、〽お藏から白酒だすではないかいナ。

此の讀賣は文久度のものらしい、おつこちといふ流行言葉は天保六年の假宅の際に

云ひ囃され、おつこち絞なども出来た、其の後は情事をいふ通言になつて明治の初まで一般に通用した、其の考證は既刊娛樂の江戸の中へ書いておいたから爰では省略する。

しんない心いきど、いっ

上

▲女こゝろのわしやひとすじに。

しん内いだ八

すいたがいんぐわ、つかのまも、そばはなるゝがいや、まして、
♪ どうまあ、かへして、やりやりよふか。

▲けさはかへつて、またきなんせと。

しん内あはしま

いふたは二人りが、いつまでも、あいとふしたいこゝろゆへ。
♪ といふて、わたしをのせるきか、

▲かほではらたて、こゝろでないて。

しん内明からす

あんまりむごい、なさけなや、こよいはなれて、こなさんの。

♪ またあふしあんがあるかいな、

▲おまへがしんでも、てらへはやらぬ。

しん内小さん

なかしやんせく、そのなくなみだは、ふか川へながれて、小さんがくんでのみ
や。

♪ わたしや、こにして、さけでのむ。

▲なにをくよく、さけでものみな。

しん内明からす

どふなるものぞ、ながらへて、わがなきあとで、一ぺんのゑかうをたのみ、さら
しんない心いきど、いっ

ばやと。

いふをとりつき、しのびなき。

▲ほんにおもへば、おまへとわたしや。

しん内つな五郎

いふはいまさら、すぎしあき、はつの一座の、つれのうち、おまへのなりふり、

あいさつが。

すいたがふたりの身のつまり。

下

▲おまへをおもふて、くりことながら。

しん内らん長

おやにそひねのゆめにさへ、見もしりもせぬ人なかへ、うられて、くるものうき

つとめ、

たよりにおもふは、ぬしばかり。

▲どふしたふかいあくゑんじややら。

しん内明からす

そなたもともにと、いゝたいが、いとそなたをてにかけて。

どふして、わかれていかりやうか。

▲あふた初會しよくわいにすいたが、いんぐわ。

しん内つな五郎

のぼりつめたる二かいのはしご、おやにさかろふ、この身のうへ。

みんなそなたが、あるゆへに。

▲せけんかねたるわたしがくろう。

しん内らん長

しんないいきどゝいつ

おまへのそうしたかんしやくは、いつものくせとはいゝながら。

〽すこしは、めをかけて、くださんせ。

▲おまへをあんじて神さまへ、しほだち茶だち、

しん内あわしま

わづか四月か五ツ月に、きつうやつれさんしたのう。

〽わづらふても、くだんすなア。

▲はりもいきじも、みなくみわけて。

しん内いだ八

おとこの身でさへ、いゝにくいに、こうしたつとめの、そのなかで。

〽みんなそなたのくめんづく。

小寺玉晁の説に従へば文政に清元入りのよしこのが唄はれた、是が文句入りの最初

であつて、常盤津富本義太夫長唄甚句まで採入れられたが、數から云へば清元入が一番多かつた、それから一時のことではあつたが字餘り文句を早口につめていふ事が流行したといふ、此の早口のこととは既に云つたが、玉晁の説では其の時期が天保らしく考へさせる、更に安政二年版のどゝいつ別世界を見るとヤンレエが採用されて居る、元治になつては詩入どゝいつもある、概してよしこの都々逸の世界は各種の聲曲が雑居するのに便利であつた、それが交雑させる機會をも與へた、此の交雑から合成されたと見るべきものが歌澤であらう、歌澤は聲の舞踊と云はれもしたが、渠の特徴は其の他に此の交雑を算へなければなるまい、我等は高尚優美といふこと、其の高いのは何に比較して高いのか、其の優れて居るのは何に對して優れたのか、それは世俗を向ふに見て云つたものだ。民衆の趣味趣向に照準していつたものゝやうに思はれる、其の證據として歌澤が適當なものだと思ふ、民衆化と高尚優美とは同行することが甚だ尠い。

新内心いきどゝいつ

- ▲ひとがいふならいはせておきな、わたしやわたしでじやうたてる。
- ▲洗あひがみのこいてうと女郎衆のむしん、とこでなければいわれない。
- ▲しだれざくらで手はとゞけども、ぬしある花ならせひがない。
- ▲おまへをおもへばよのめもねづに、とはすがたりのなき寝ねいり。
- ▲三味させんのとでさへ、これ此やふにきれたそのときやわるいもの。
- ▲ほとくけふ日は身みにつまされて、おちぬしあんにでるなみだ。
- ▲けふだいにもたれてほつとためいきついてたてし鏡かみのうすぐもり。
- ▲いろけしやうばいわたしにさせて、うわきをするなもよくできた。
- ▲人はちよいと見てちよいとぼれるが、わたしやよく見てよくほれる。

- ▲せかれていながらまたかうしきき、きてはちらくまよはせる。
- ▲おつこちかゑしてたゞぼうせんと、よぎにもたれてしあんがほ。
- ▲ほれたおとこはかはいゝものよ、おきのどくだが、ぬしぢやない。
- ▲あゝもうれしやゆしまのつきどめ、六百兩がぼんとこつちへおつこちだから、かねうけとりにいつたら目がさめた。
- ▲みこはすゞふる、やりもちややりふる、女郎衆はきやくをふる、ぶちはおゝふる、かごやさんはしりをふる。
- ▲いろにやよけれど女房にやわるい、ぬいはりしごとは、てぶつてうで、ゆにいきやはん日、あさねがすきで、そしてはやいはしりばかり。
- ▲いろにやよけれど、ていしゆにやわるい、おはなしばくちにおんながすきで、さけはそこぬけのんではぶうくくだをまく。
- ▲山おくのあの大木たいぼくもまきとなり炭すみとなり、あげくのはてにはたどんとなつて、いや

なおかたにだきねをされて、そのうへ夜中ちぶんにさせるで、あたまをちよいとはられ。

▲うらのはいごやで出あいをしたれば、はないきのあらいので、はいがばつくと、ふきとぶやら、まさざつぼうがとんで出るやら、あげくの果には、たくあん石が飛で出た。

江戸の女が洗ひ髪へ新葉かけた風姿は如何にも瀟洒なもので、専ら市井の情味を發揮したもの、また此の二つの都々逸によつて、厭ふべき夫と嫌ふべき妻とを表明し、結婚の標的を見せたのが面白い、其の色には好いがと云つた處は、有體に當時の戀愛觀を抛出して居る、江戸の或る階級は八代集のお公卿さんのやうに戀愛ばかりで結婚のないのが多數であつた、さうした階級の幅は先づ瓦板の行はれた直徑と略々同じであらう。

御ふじ山新もんく

上

- ▲一ツトせいちばんめにつくこのおやま、
てんにも、からにも、ありやせまい、コノおふじ山。
- ▲二ツトせ二合めのやくばにをむろみや。
ついにとやさいんしるします、コノおふじ山。
- ▲三ツトせみなもでてみなこのどふしや、
かけねんぶつでのぼります、コノをふじ山。
- ▲四ツトせ四月のかのいにやまあきで、
あまたのこうちうおたきあげ、コノをふじ山。

- ▲五ツトセ五合きやまにみたけさま、
あまたのかなものおさめおきコノをふじ山。
- ▲六ツトセ六合のむろいとまります、
はやだちいたすも、どふしやさんコノおふじ山。
- ▲七ツトセ七合めにはみろくさま、
ごらいこうさまをおがみますコノおふじ山。
- ▲八ツトセ八合めにと、はやなれば、
ぎよどういたしてのぼりますコノおふじ山。
- ▲九ツトセ九合壹升とはやなれば、
おやくしさまいと三げするコノおふじ山。
- ▲十ツトセとうくちようじよういのぼりつめ、
心をそろへておがみますコノおふじ山。

下

- ▲十一トセ一ばんたかいはけんのみね、
のぼりて下りにあしをとるコノおふじ山。
- ▲十二トセ二ばんにまはるはきよがたけ、
にちれんさまにはさいかはらコノおふじ山。
- ▲十三トセ三びくいちのこのおやま、
このよに二ツはありやせまいコノおふじ山。
- ▲十四トセひろきおやまのそのうへに、
ぎんめ水にはきんめ水コノおふじ山。
- ▲十五トセ五中どまはりのおやくには、
ほうへいざんから大さはいコノおふじ山。

- ▲十六トセ六十年おかいちように、
女人もおやまをいたしますコノおふじ山。
- ▲十七トセ七月下じゆんのまつりには、
たいまつとぼしておもしろくコノおふじ山。
- ▲十八トセお八りよまはりてしまいは、
三ごく一のあまさけをコノをふじ山。
- ▲十九トセ下りてさんけいおたいない、
むまれていではとりあげ水をコノおふじ山。
- ▲二十トセ二はかにおやまもしまいます、
わがみも吉田でおめてたやコノおめでたや。

此の一ツトセは、婦女の登山を禁じて居た富士へ、庚申の年に限つて上らせる例だ

つた、六十一年目でなければ婦女の富士登山はないのだから、萬延元年にも斯うしたものが、読み賣にもなるのであつた、孰れにも山が開けてから賣廣めたのであらう、三月上巳に井伊大老の首が飛んで未だ間もない時、平氣で斯うしたものに興じて居た、其の襟度があればこそ江戸開城の後始末が思つたよりも簡易であつた、それは新政府の骨折りの尠かつたのを祝ひ申すよりも、民衆の幸福だつたに違ひない。

しん作つゞき文句成田ぶし

上

- ▲一ツトやいちばんめにつく本^{ほん}どろは、つばかね大工がゑづをひくコノ成田山。
- ▲二ツトや二ばんのしゆうが、うちそろい、かうとなきやりでぢぎやうするコノ成田山。
- ▲三ツトやみごとなあしばや、たてかたは、まさしく新勝寺のとびの衆コノ成田山。
- ▲四ツトやよればさわれば、ほりものをりつばとほめたつ人ばかりコノ成田山。
- ▲五ツトやごはいのまはりをみまわして、うしろのはめどは五百らかんコノ成田山。
- ▲六ツトや六十よしうのめいじんが、みなあつまりて名を^{のこ}残すコノ成田山。
- ▲七ツトやなかにはくじやくや、はうわうの、めもとにうきたつがう天せうコノ成田山。

- ▲八ツトややねはいりもやはふづくり、あかがねりつばにふきあげるコノ成田山。
- ▲九ツトやかうらんまはりやあがりだん、下りてふりむく人ばかりコノ成田山。
- ▲十トやとうくふしんもでき上り、このうへりつばはありやせまいコノ成田山。

下

彫 傳 作

- ▲十一トや一ばんめぬきはしゝりうの、さく人はせ川ごんのかみコノ成田山。
- ▲十二トや二ほんにぬきだすたる木まで、こぐちにかなものりんぼ形コノ成田山。
- ▲十三トやさんけいたび人あしをとめ、ふしんにみとれてとまりきやくコノ成田山。
- ▲十四トやひろきせかいに二どゝない、にうぶつ、むねあげいたしますコノ成田山。
- ▲十五トや十五日かぎらず、さんぐわつは、あまたのさんけいくんじゆなすコノ成田山。

- ▲十六トや十六らかんは、そとのはめ、なかには花鳥の大らんまコノ成田山。

- ▲十七トや七とうがらんそのなかに、でばん所けやきの表門おもてコノ成田山。
- ▲十八トや八月六日のごじやうとう、むねあげあしばのかざり付コノ成田山。
- ▲十九トやくんじゆの人のとまりやで、きやくどめするほど人がでるコノ成田山。
- ▲二十トやにはかにすつぱりできあがり、りつぱに成田でおめでたいコノお目でたい。

慶應三年けいおうに成田なりたの新勝寺しんしょうじの改築かいちくが落成らくせいした時とき、其その宣傳せんてんのためために江戸えどで此この讀賣よみうりを利用りようしたものらしい、我等われらは彼の時世じせいにも信心者しんくものを下總しもふさまで引附ひきつける不動様ふどうさまを感服かんぷくするだけでなく、あゝした時節じせつに新工事費しんこうじひを集めた處ところを更さらに／＼感服かんぷくする。


東海道こちやゑぶし

- ▲ちらとみそめし日本にっぽんばし、ふみをつけ、わたりそめたる戀こひのみち、コチャエー、いろよきへんじを品川しんがわや、アリヤエー、コリヤエー。
- ▲かわいかわさき女夫めをとばし、わしやうれし、つもるおもひもかな川がわで、コチャエー、ほとがやよいのに、わしやほれた、アリヤエー、コリヤエー。
- ▲とつかまらじとふじ澤さわも、よなかだち、みちはひらつか大いそぎ、コチャエー、小田原こだけんさげたるはこねごし、アリヤエー、コリヤエー。
- ▲みしまじんじやは一のみや、ふしおがみ、さけも沼津ぬまづとがんかけて、コチャエー、にせもかわらぬ原はらじやもの、アノコエ、コノコエ。
- ▲ふじのけしきも吉原きちげんで、見渡みわたせばひと目めにかんばらゆひがはま、コチャエ

！。

- ▲おきつねつして、まつよには、[〽]きもそどろ、ゑぢりもぢりとよをふかし、コチャエー、あたりもしんくしづおかの、アチャエー、コチャエー。
- ▲はまりこまれて、きもおかべ、[〽]いちらしや、ふぢゑだむすめのなげしまだ、コチャエー、ねがいもかなやで日坂^{にっさか}へ、アチャエー、コチャエー。
- ▲つもるおもひをかけ川の、[〽]つけぶみを、いつしかおふくろにみつけれ、コチャエー、はま松なみ風たちさわぐ、アチャエー、コチャエー。
- ▲人のまいざか、きをかねて、[〽]あけくれに、あらることばもかけはせぬ、コチャエー、うわきは男のつねじやもの、アノコエー、コノコエー。
- ▲人のうわさはしらすかと、[〽]しらぬかほ、ふた川心があるうとも、コチャエー、りんきは女のはじじやもの、アチャエー、コチャエー。
- ▲とよはしかけたるかよひぢも、[〽]戀^{こひ}のやみ、ごゆだんなさるな、あとやさき、コチャエー、はくとうてくどのしやばじやもの、アチャエー、コチャエー。
- ▲かほはあかさか、きはもみじ、[〽]はづかしや、せきしろ心はふじ川のコチャエー、ながるゝはやせのさかおとし、アノコエー、コノコエー。
- ▲すてゝおかざき、まゝの川、[〽]人のくち、ちりふじんじやへがんかけてコチャエー、まゝに鳴海^{なるみ}をまたしやんせ、アノコエー、コノコエー。
- ▲たがゐにあつたの中じやもの、[〽]だますとも、そのてはくはなのはまぐりで、コチャエー、やいてもはなれぬめをと貝^{がい}、アチャエー、コチャエー。
- ▲ゆびおりかぞへて四日市、[〽]くるはづの、かたいやくそく石やくし、コチャエー、おきてはまぼろし、ねてはゆめ、アチャエー、コチャエー。
- ▲つまにせうのとつれだされ、[〽]たのもしや、すへは萬年かめ山と、コチャエー、二世も三世ものちのよも、アチャエー、コチャエー。
- ▲たがい心はせきの宿^{しゆく}、[〽]いそがんせ、くさをまくらの坂の下、コチャエー、雨露^{ふめつゆ}

さらしもないとやせぬ、アチャエー、コチャエー。

▲のぼる土山さかみちも、てをとりて、みなくちぐくにいわれよと、コチャエー、人めをいとわぬたびじやもの、アノコエー、コノコエー。

お江戸日本橋七ツ立ちといふのが、コチャエーの原唱であらう、其の全編は俚謠集拾遺に載つて居る、だがコチャエーは幾種にも唄はれた、我等が幼時の記憶にも二三種あつたやうに残つて居る、今日としては此の替へ唄の瓦版四枚だけ、手に入つたのみで、是だけでも完全に傳へたいのに、殘闕であることは如何にも惜しい、何時でも補足し得られる機会があり次第に、追加したい心掛けは怠らない。

俚謠集拾遺には此の原唱を全收し、其の本唄は天保度の羽田節、おまへまちぐ蚊屋の外、蚊に食はれ、七つの鐘の鳴るまでもコチャカマヤセヌ〜だといつてある。是は如何にも御説である。

大正十五年八月十七日印刷
大正十五年八月十日發行

(瓦板の流行唄)
(定價金貳圓五拾錢)

印檢者作著



著作者 三田村 玄龍

東京市日本橋區通四丁區五番地

發行者 和田 利彦

東京市京橋區南鍛冶町十一番地

印刷者 川村 清次郎

東京市京橋區南鍛冶町十一番地

印刷所 川安 印刷所

發行所

東京市日本橋區通四丁區五番地
(電話大手五二一・四二一〇)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

三田村鳶魚氏著作集

歴史は國民生活の中心として記述されるべき。然らば歴史は悉く新書に替へる必要あり。其の要るべきは、新書に替へる必要あり。其の要るべきは、新書に替へる必要あり。其の要るべきは、新書に替へる必要あり。

鳶魚隨筆

内容 彌次喜多の大阪見物、東海道膝栗毛の趣向、珍曲綾鶴、大阪の切支丹、鎌倉武士の信仰状態、壬生の假面扮戯、千本の本行、小唄の岡崎、淡路の人形座、撫養人形、甘茶でカツボレ、カツボレと四班舞踏、大黒舞の本跡、元祿の藝角舩、最初の落語、落語の佃祭芝濱の財布、閻魔の目玉、柿三升、若衆齋、お初の齋、おちやつびい、西鶴の當世顔、戀の病、文人畫は空腹の厭勝、足輕、おきみエリオン心中、十八大通、大名の御役騒ぎ、徳利門番、初鯨、花火船、御所繪、天璋院様一枚繪、浴禪論、金龍山の米餛飩、三圍稻荷の鳥居、柳森稻荷の鐵水盤、びいどろ昔譚

定價 貳圓七拾錢
送料 拾八錢

鳶魚劇談

内容 春花五大力、忠臣藏討入、男作五雁金、唐土織日本手利、敵討崇禪寺馬場、新吉原瀬川復讐、大岡政談、松葉屋瀬川、田村磨鈴鹿合戦阿漕浦平治住家、蝶千鳥、法界坊の故郷、關の小萬、義士喰ひの妙海尼、撞木町の大石内藏助、松平外記の五人斬、王子稻荷の狐、「菊畑」は蝦夷の事實か、河内山宗春餘談、傳統した明治初年のトッテル拳、隨筆三人吉三、三人吉三注文帳、「井伊大老の死」の舞臺面、改造の小猿七之助、新黙阿彌劇、順番と團七篇、新富座の東男、帝劇の亂れ金春、吉右衛門の旗揚、舶來の忠臣藏、都一中と二枚繪草紙、菊五郎の鏡獅子

定價 貳圓八拾錢
送料 拾八錢

江戸の芝と上野淺草

定價 金拾八錢
送料 拾八錢

547

243

終